

ひとりの「タウントゥー」

ネイ・ミョウ・アウン

ネイ・ミョウ・アウン。この名前を両親から授かった。「アウン」という言葉は私の父の名前と共通だ。このアウンは実際、多くのミャンマー人の名前に使われている。我がが独立の父「アウンサン將軍」の名前にもアウンが入っている。彼の娘は民主化のリーダー、アウンサンスーチーであるがそこにもアウンが含まれている。アウンは姓ではない。私の祖父の名前はバ・カインである。父の名前も祖父とはまるっきり異なる。ミャンマーの人々の名前は何を基本としてつけられるのだろうか？人々がどこで生まれたのか、何曜日にも生まれたのか、何時に生まれたのか、等々が命名の際の決め手になるのだ。基本になるのは占星術の考え方だ。もっと詳しく知りたいかたはつぎのサイトを訪ねるとよい。ミャンマーで人の名前がどのようにつけられるかが分かる。

<http://www.myanmar.net/myanmar-culture/myanmar-naming-system.htm>

さて、私自身の話に戻ろう。

私はミャンマーの中部に位置するマグウェイ県のプウンピュー市に生まれた。プウンピューというのは「白い花」という意味だ。白い花という街で生まれたのであるが、私の肌は茶色である。そう、本当に茶色といつてよい。私の父の母、つまり私の祖母の名前はニョウである。意味は褐色の夫人というもの。祖母はやはり中部に位置するマンダレイ県のタウンターという市のある村で生まれた。祖母が何年に生まれたのか私は知らない。私の父も同じ村で生まれた。我々は祖母を「マミーブラウン」（茶色いミイラ）と呼んでいた。我々は決して「おばあちゃん」とは呼ばなかった。私の祖父は第二次世界大戦中、日本占領下にあったミャンマーをイギリス軍が空爆したときに殺されてしまった。祖父は友人らとともに農作物を街で売り歩いていたので。友人達は幸いにも爆撃から逃れることができた。私の父は祖父が亡くなったときまだ一歳の赤ん坊だった。祖母はこの事件を信じるのができなかった。そして夫が帰ってくるのを村の入り口で私を抱えて五年間も待ち続けていた。本当に彼女は待ち尽くしたので。

我々の子供時代は、夏休みが待ち遠しかった。毎年夏になると祖母の生まれ故郷の村に遊びに行つた。そこを訪れるのは本当に楽しかった。我々の先祖は「タウントゥー（高地の農民）」であった。村に到着すると牛糞と土が入り交じつたにおいが鼻をつく。「茶色いミイラ」はいつ我々が来るか知っているのでもいつも村の入り口で待っていて、我々を出迎えてくれた。彼女は神経系統の病気を持っており頭がいつも震えていた。彼女には息子が一人いるだけだった。父には兄弟がいない。祖母の親類もきて我々を出迎える。そのほかの村人も実際知り合いかどうかにかかわらず暖かく

我々を出迎えてくれた。これは村のすばらしい習慣である。このような習慣はミャンマーでは、どの村でも見られるものである。父は近くの市にある学校に進学した。というのも当時は、我々の村には進学しようにも進学先の学校がなかったからだ。父はマンダレイ大学を卒業した。大学の休暇中は父は学校から村に戻ると、農作業を行わなければならなかった。父は農業生産者であった。つまり「タウントゥー」だった。

そう、私は零細な「タウントゥー」一家の出身である。この言葉は「タウンヤー」という語に由来する。「タウン」というのは丘を意味し、「ヤー」は丘陵地を耕してつくつた畑作の一区画を意味する。「タウンヤー」方式というのがあって、それは一年生穀物の生産と植林からなる。もともとミャンマーの移動耕作を示す言葉であった。森の木々を伐採して焼き払い耕地とする焼き畑の技術である。焼き畑法は自家消費の穀物を生産する農民によって営まれる生活の糧のための農法であった。しかし、その後「タウンヤー」という言葉は丘陵地の移動耕作だけではなく平野での灌漑を利用せず雨水に依存する一般の農法にも使われるようになった。耕地での田畑で穀物を育てる農民は「タウントゥー」と呼ばれるようになった。私の父、祖父、そして私の先祖はみな「タウントゥー」である。昔から彼等は高地の土地を耕してきた。彼等は自分たちで食べる作物を作ってきた。私自身は「タウントゥー」の仕事を継いでいるわけではないのだが、彼等の血はしっかりと私の体内を流れている。彼等の習わしは我々の習わしでもある。彼等が信じることを我々も信じている。彼等は村を愛していた。私自身もこれからずっと「タウントゥー」のままいたいと思う。

Nay Myo Aung / アジア経済研究所海外客員研究員

Lecturer, Yezin Agriculture University
研究課題：Market-related Reforms and its Impact on Rice Industry